

伊藤若冲の歌仙図について 俳諧文化・光琳画・豆腐愛好との関わりから

馬淵美帆（愛知県美術館）

本発表では、伊藤若冲の歌仙図、即ち寛政三年（一七九一）の掛幅の《六歌仙図》（愛知県美術館蔵・木村定三コレクション）と、同八年の《三十六歌仙図屏風》（デンバー美術館蔵）について考察する。前者は後者に先立つ歌仙図の作例として重要であるが、本発表で初めて本格的に取り上げられるものである。

若冲の歌仙図は、若冲画の中でも戯画的な要素が強いことが特徴であり、野々口立圃などに発する、俳画系統の「遊び歌仙図」ともいうべきものが下敷きにある。若冲の歌仙図は、基本的に俳諧文化の側からのものであり、彼の身近な所に俳諧文化の存在を指摘できる。愛知本は、松尾芭蕉百回忌目前の蕉風復興運動の盛り上がりの中で、芭蕉の句を踏まえて描かれたと見る。

若冲の歌仙図はそれと同時に、構図や歌仙の姿などが尾形光琳の歌仙図を意識しており、そうした画のパロディとして描かれたと見られる。また、描写は光琳の墨画系人物図に倣う。愛知本では、光琳画のパロディであることを、光琳模様の「光琳菊」を描き込むことで明示しており、若冲の光琳理解が純正な光琳作にとどまらない、より幅広いものであったことも確認できる。

若冲の歌仙図において、俳画系統の歌仙図に光琳の歌仙図を融合した背景として、当時の俳人の中で光琳が高く評価されていたことを想定する。光琳画が俳画に取り入れられた例を新たに紹介しつつ、俳人の中で俳味があるものとして光琳画に関心が向けられていたことを述べる。若冲の歌仙図が、光琳の歌仙図がもつ飄逸性を増幅していることも、俳人の間での光琳観に基づくものと考えられる。当時の画譜や画論等の文献の光琳評を見ると、光琳は松花堂昭乗や立圃・英一蝶などとまとめて、独特な画風で一家を成した画家として分類されることが多く、こうした言説により、俳人が光琳を俳諧・俳画の流れに結び付けて評価したものと思われる。若冲は同時代の光琳評を共有した上で、自らも光琳やその括りの画家達に連なる者として自覚していたのではないだろうか。

若冲の歌仙図は、歌仙が田楽を作る様子を描く構想から発しているが、これは、俳諧の「歌仙」に似て三十六通りの料理を「歌仙」と称する「歌仙料理」や「歌仙豆腐」という言葉を、洒落として、文字通り歌仙が豆腐料理を作る図にしたものと考えられる。若冲の周囲に特に豆腐料理を好む環境があったことは、天明二・三年（一七八二・八三）に刊行され、大流行した料理本『豆腐百珍』・『豆腐百珍続編』が、曾谷学川ら、混沌社を中心とする大坂の文人グループのもとで編纂され、若冲も読んだと思われることからわかる。田楽は、両書に記述が多く、学川が個人宅で集まりの際に作って酒と共に供していたこともうかがえる。

若冲の歌仙図は、前の時代の光琳が描いた、古典・和歌の世界である歌仙図を、当代の若冲が、俳諧の世界の歌仙図としてアレンジした作品であるといえる。注文主としては、光琳画にも造詣の深い教養ある俳人が想定され、特定は難しいが、豆腐料理愛好との関わりなどから、大坂の文人グループと近い所にいた可能性が高いものとする。